

テンス，アスペクト および ムード

——「～ていく」と「～てくる」の文法——

牧 内 勝

0. 0. 本稿は，現代日本語の，いわゆる「助動詞」の中から，相対応する二組の形式をとりだし，その文法構造を明らかにすることを目的とする。具体的には，「『て』付助動詞」の中から，{～ていく} {～ていった}，および {～てくる} {～てきた} の二組を選び出し，これを共時論の立場から，とくに意味の構造を中心に考察する。この二組の助動詞で問題とする文法範ちゅうは，テンス（「時制」），アスペクト（「相」）およびムード（「法」）の三つである。

本稿で呼ぶ「『て』付助動詞」とは，{～ていく} {～てくる} の他に，{～ている}，{～てある}，{～てしまう}，{～てみる}，{～ておく}，{～てもら}う}，{～てやる}，{～てくれる} などを含む，常に「て」を伴って本動詞のあとに直結して用いられるものを指す。この十箇の助動詞には，統辞・意味両論からみて，一つのグループにまとめられ得るような共通性がいくつかみられる。しかし本稿では，その共通性について，詳しくは触れない。たとえば，これらが「助動詞」であるという根拠や，他の助動詞との異同や，さらに，これらの「生成ルール」なども取り扱わない。以上の諸点を本格的に取り扱うためには，まず各々の助動詞の文法構造を，今日まで学界でなされて来た以上に，もっと厳密にかつ深く検討しなければならないと考える。本稿で，二組の形式だけを取り出して考察する理由もそこにある。¹⁾

1. 0. まず、テンスに関して、現在形の {る(-ru)} をもつ {～ていく}、{～てくる}、および、過去形の {た(-ta)} をもつ {～ていった}、{～てきた} の四形式を問題とする。これらの四形式に更に他の形式のついたもの、たとえば、{～ていったものだ}、{～てきたことがある}、{～てきてしまった}、{～ていくでしょう} などや、命令形の {～ていけ}、{～てこい} などの形式は取り扱わない。さきに述べた四つの基本形に限定する。初めに現在形の {～ていく} と {～てくる} を、次に過去形の {～ていった} と {～てきた} を問題とする。

1. 1. まず、{～ていく} という現在形に対応する「時間」には、二種類ある：(1) 「現在」から「未来」への経過を表わすもの；(2) 「未来」のある時から、更にさきの時への経過を表わすもの。「過去」の時には言及しない。以上の点が事実である根拠を示すために、時を示す副詞との共起関係を調べてみる。まず、「過去」と関係しない点は、次のように、「過去」を出発点とする時間副詞と共起しないことから明らかである。

(1) * 先月から毎朝5時に起き、ランニングをしています。

(2) * 昨年从去年から毎月5冊ずつSFを読んでいます。

次に、「現在」を起点として「未来」への経過を表わす例として：

(3) 今日から悪習は捨て、善い習慣を身につけるよう、生活を改善していきます。

「現在」を示す副詞は {今日} に限らず、「現時点」を含む副詞なら、その時間帯はいくら広がっても構わない。すなわち、{今日} の代りに、{今} {今月} {今年} などでもよい。また、はっきりと現在時点を示す副詞が顕在していな

い文, たとえば,

(4) 停年になるまで, この仕事を続けていきます。

の文では, {この仕事} からわかるように, 現在の時点で従事している仕事があり, それを将来まで (停年まで) 継続する予定又は決意を表わしている。

「過去」(昨日でもよい) においてこの仕事に従事していたか否かは問題ではない。

次に, 「未来」のある時点から更に「未来」への経過を表わすものとして,

(5) 明日からでも, この悪習を改めていきます。

(6) 来春卒業したら, 自分の好きな趣味を思うぞんぶん生かしていきます。

(5) では, {明日} の代わりに, {来月} {来年} でもよい。その未来の時点から更にさきまで悪習を改めていく決意や予定を表明している。(6) は未来の時点({卒業したら})を出来事({趣味を生かす})の出発点としている。

1. 2. {~てくる} も, 前節の {~ていく} と同じ時間に言及する。すなわち (1) 「現在」→「未来」, および (2) 「未来₁」→「未来₂」という経過を示す。「過去」とは関係しない。

(7) a) 今日 }
b) 明日 } から日一日と夜が長くなってきます。
c) * 先月 }

以上のほかに, 習慣・一般的事実・真理など, {いつも} {たえず} などの

時間副詞の潜在している、いわゆる「時制不在」の場合、この形式が用いられる。{～ていく} もほぼ同じ意味を表現できる。

(8) 森の中で大声をあげると、こだまになってかえってくる。

(9) 水は、高きから低きに流れていく (ものだ)。

ところで、次の用例にみられるように、同じコンテキストを与えられながら、一方は文法的で他方は非文法的なものがある。その理由は、{～ていく} {～てくる} の時制に関するのではなく、各形式のアスペクトによる制限とみなすことができるので次章 (2. 0.～2. 5.) で取り扱う。

(10) 今日から、まじめな生活をし $\left\{ \begin{array}{l} \text{ていく} \\ * \text{てくる} \end{array} \right\}$ 覚悟です。

(11) 明日から、待望の生活がやっ $\left\{ \begin{array}{l} * \text{ていく。} \\ \text{てくる。} \end{array} \right.$

1. 3. {～ていった} は、「過去」のみに関係し、「現在」と「未来」には関係しない：

(12) $\left\{ \begin{array}{l} * \text{ 今日から} \\ * \text{ 明日から} \end{array} \right\}$ 毎月一万円ずつ貯金していった。

(13) 1950年初頭から1960年終りまで、この地域の人口は激増していった。

(14) 夜が更けるにしたがって、幸子の心配は増していった。

(13) と (14) からわかるように, {～ていった} は, 過去のある時点から, それ以後の過去の時点 (特定, 非特定にかかわらず) までの, ある動作の経過を示す。

1. 4. {～てきた} は, 「未来」とは関係せず (= (15)), 「過去」と「現在」の両者にあたる二種類の時間を示す: (1) 「過去₁」→「過去₂」 (= (16)), および (2) 「過去」→「現在」 (= (17)):

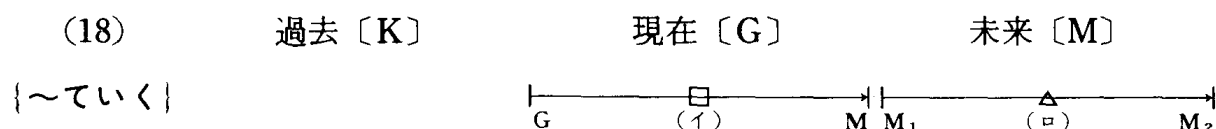
(15) * 来る 4 月 1 日から, 当社は貴会社と作業部門で提携してきた。

(16) そうこうしているうちに, 雨が降ってきたんです。

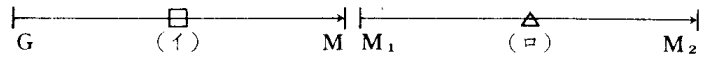
(17) 最近, 小学生の自殺が増加してきた。

(15) は, 「未来」を示す {来る 4 月 1 日} とは共起しない例。(16) は, 過去のある時点で雨が降り始め, その後ある期間降り続いたことを意味する。²⁾ (17) は, {最近} の許容範囲内における過去 (のある時点) における小学生の自殺件数と, 今日 (現時点を含むやや広範囲の時点で) 知った数との間に増加の現象が見られたことを表現している。したがって, (17) の場合は, 「現在」も増加の「結果」が残っているのであって, 英語の「現在完了」に相当する。

1. 5. 以上みてきた四形式のテンスの言及する時間をまとめると, 次のような図になる。



{～てくる}



図式から明らかなことは、第一に、三つの対応関係があること。すなわち、
 a) 現在から未来 (= (イ)), b) 未来のある時点から更に未来 (= (ロ)), c) 過去のある時点からそれ以後の過去の時点 (= (ハ)), の三種の時間的経過を示すのに、それぞれ一对の組み合わせが可能である。第二に、{～てきた}の示す、過去から現在までの時間的経過 (= (ニ)) に対応する {～ていった} は欠落しており、{～ていった} は、もっぱら、過去のある時点からそれ以後の過去のある時点までの経過を表現する場合にのみ用いられることがわかる。

テンスに関して、三つの「対応関係」が存在するということは、そのままその対応するもの同志を交換することが可能であることを意味しない。テンスが同一でも交換不可能な場合もあるし、たとえ交換可能であっても、微妙に意味の相異が現われる場合がある。この両方の場合については、それぞれ次章のアスペクト、および、第3章のムードのところ考察することにする。

いま、図式で明らかにされた第二の点についてのみ注目すると、{～ていく}の過去形 {～ていった} は、過去から現在に至る過程を示す時間副詞とは共起しない事実により、あくまでも、「過去」のみに関係した経過を表現するものであることがわかる。たとえば：

- (19) 最近、小学生の自殺が増加し $\left\{ \begin{array}{l} \text{a) ってきた。 (= (17)) \\ \text{b) * ていった。} \end{array} \right.$

(19)において、時間副詞の {最近} は、過去のある時点から現在までを示

すので, {~てきた} とは共起し英語の現在完了に等しいテンスを示すが, 一方 {~ていった} は, これと共起しない。{~ていった} は, あくまでも現在とはかかわりなく, 過去の事実を追想するとき用いられる。したがって (19) は, テンスによる文法制限を受けている例である。

2. 0. 前章において, 問題としている四つの形式は, いずれも時間の「経過」を表わしていると述べてきたが, その定義は見送ってきた。ここでその内容を検討してみよう。まず次の例文を考えてみる。

(20) この貴い教えを, 明日から毎日欠かさず, 自分に言い聞かせ

{ a) ていきます。
b) ます。

(21) 最近, いやに小学生の自殺(件数)が増加し { a) てきたね。
b) * たね。

(22) あの子は, 見るたびに大きく { なっ { a) ていく(ていった)。
b) てくる(てきた)。
c) * なる(* なった)。

(20) は, {明日} という「未来₁」から, 更にさきの「未来₂」に向けて, {自分に言い聞かせる} という行為を, 毎日欠かさず実践していくという予定なり決意なりを表わしたものである。(20 b) の方は, 毎日の行為を「一回的」に(一回一回の行為として)とらえているのに対し, (20 a) の方は, 「連続的・継続的」とらえている点に相異がみられる。

(21) においては, {最近} という時間副詞が, 少なくとも数年以前から今日までという「複数の年月」を表わすため, 一回的な増加を示す (21 b) は適当

でなく、「累積的」な増加を示す (21 a) の方が適切な表現である。

同じように (22) においても、頻度数を示す副詞表現の {見るたびに} は、あまりかけ離れない期間に、初見を除き二回以上 {あの子} を見ていることを予想するので、(22 a) および (22 b) は適切であるが、(22 c) は不適切である。もし、ただの再会ならば、(23) が適切な表現となる。

(23) あの子は、(* 見るたびに) 大きくなったね。

以上をまとめると、四つの形式は、いずれも、a) ある「期間」の(複数にわたる)行為や動作を示し、しかも、b) その行為・動作が、「連続的・継続的・累積的」のいずれにせよ、その期間中に「反復」されることを表わしている。この両者の特徴を一つにまとめて「経過」と呼んできたのである。

2. 1. すでに 2. 0. の説明からも明らかなように、この両者の特徴(すなわち、ある「期間」にわたる「反復」的な行為・動作)は、それぞれ、相当する副詞表現と「呼応関係」(または、「共起関係」)にある事実を、以下に指摘してみたい。

「期間」を表わす副詞表現には、以下のものがある。

- (24) a) {今日から; 来年から; 昨日から; ……}
- b) {明日まで; 1960年まで; 死ぬまで; ……}
- c) {最近; 一生涯; ずっと; ……}
- d) {~するにつれて; ~するにしたがって; そうこうするうちに;
 ……}

(24 a) および (24 b) は、それぞれ、「期間」の「始点」および「終点」を示すが、当該の四形式をもつ文中では、そのどちらかが顕在し、他方が潜在

するか,あるいは,両者とも顕在,または潜在している。たとえば,(20)では,「始点」は顕在しているが,「終点」,たとえば{死ぬまで},は潜在していると考えられる。

(24 c)は,一語の中に「始点」・「終点」がともに含まれていると考えられるし,(24 d)は動詞を含む副詞表現で,ここにも漠然とではあるが,「始点・終点」を含むなんらかの「期間」の意味が含まれている。

以上のような「期間」を示す副詞表現と対立するのが,以下のような「時点」を示す副詞表現であり(=(25)),したがって,(26)の例からわかるように,この四つの形式とは「共起」しない。

(25) a) {今日;明日;死にぎわ;……}

b) {あの時;その瞬間;……}

c) {～した時;～する時;……}

(26) a) * この貴い教えを,明日自分に言い聞かせていきます。

b) * 今年度は,いやに小学生の自殺が増加してきたね。

次に,「経過」に含まれる,もう一つの特徴である「反復」に呼応する副詞表現は,次のような「漸次(進行)」を示すものである。

(27) a) {だんだん;どンドン;しだいに;ますます;少しずつ;じょじょに;ぼつぼつ;……}

b) {～するたびに;～するごとに;ひと雨ごとに;……}

この副詞表現も,「期間」を示す副詞表現と同じように,四つの形式の文中に,顕在する場合と,潜在する場合とがある。(22)の例では顕在するが,(20)では,{毎日欠かさず}という表現の中に,{新しい日がめぐってくるたびに}

が、(21) では、{いやに} という表現の中に、{ますます} の（増加の進度が意外に早いという）意味が、それぞれ潜在していると考えられる。

(27) の副詞表現に対立するものは(28)であり、したがって、(29) にみられるように、四つの形式とは共起しない。

(28) {一回だけ; いっぺんに; 一期に; ひとたび; ……}

(29) a) * この貴い教えを、一度だけ自分に言い聞かせていきます。

b) * 小学生の自殺が、一度に増加してきた。

c) (昨年初めて会い、今日再会した時、すなわち、比較の回数が一回の時)

* あの子は、大きくなってきたね。(cf. あの子は、大きくなったね。)

以上で、四形式が、「期間」および「漸次」を示す副詞表現と、密接な呼応関係をなしている事実が確認された。

2. 2. 以下で、上に述べた「経過」という文法概念のほかに、「方向」という概念も要請される点を考察してみたい。まず次の例文をみてみよう。

(30)(=(20)) この貴い教えを、明日から毎日欠かさず、自分に言い聞かせ

{ a) ていきます。
b) *てきます。

(30 b) が非文法的である理由は、どう説明したらよいだろうか。

まず(30 b) の {~てきます} は、1. 5. でみた通り、対応する {~ていきます} と同様に「未来₁→未来₂」の時間を表わすことができ、同時に、両者とも「経過」を含むから、交換可能なはずである。にもかかわらず、(30 b) は非

文法的である。したがって、別な理由が見い出されねばならない。

そこでわれわれは、(30)の複合動詞「言い聞かせる」の「主語」に注目する。ここでは、話者である「私」が主語である。一人称のほか、二人称、三人称を主語に置いても、このコンテキストでは同じように「～てくる」は許されない。

- (31) $\left\{ \begin{array}{l} \text{君} \\ \text{彼} \end{array} \right\}$ は、この貴い教えを、明日から毎日欠かさず、自分に言い聞かせ
*てくる、といった。

同様な制限は、動物についても言える。

- (32) この犬は、明日から保健所で飼われ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ていく} \\ * \text{てくる} \end{array} \right\}$ ことになりました。

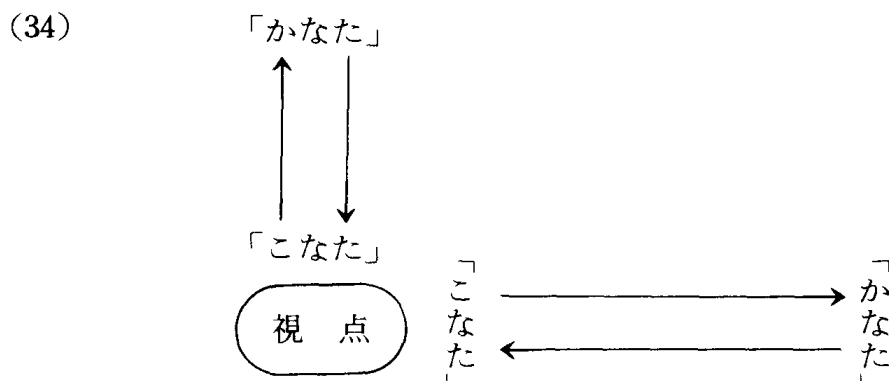
ところが、次のように無生物が主語になったり、また、あとでみる通り (= (48)), 人間でも体の一部が主語になったりする場合は、両方の形式を許す。

- (33) 明日から、夜は日一日と長くなっ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ていきます。} \\ \text{てきます。} \end{array} \right.$

以上のことから、生物それ自身が主語の場合には、「～てくる」は、(18)の図で示した範囲の時間の中でも用いられない場合のあることがわかる。(18)の図は、四形式の前にくる動詞の「主語」とは関係なく、それぞれの時間上の適用範囲を示したものであり、今ここでわれわれは、当該の主語が生物の場合と、無生物の場合とを区別して考察する必要に迫られたわけである。

そこで、話者の「視点」を基準とした「方向」という概念を導入してみよう。そして、この「方向」の視点側を「こなた」、視点から離れた側を「かなた」と呼ぼう。すると、視点を中心としてすべての方向に「こなたよりかなたへ」と、

「かなたよりこなたへ」という、基本的に二つの方向が成立する。これを図式化すると次のようになる。



ところで、時間の世界はいわば一次元であって、過去から現在、現在から未来へと一直線をなしている。しかも時間の流れは一方向であって、過去から未来に向っている。この直線上の「現在」が「発話時点」であり、かつ話者の「視点」でもある。この視点から離れた「かなた」の方向への流れ、すなわち未来の方向を示すのが {～ていく} であり、一方、過去の「かなた」から、視点の「こなた」に向く流れを表わすものが、{～てくる} と {～てきた} である。{～ていった} の場合は、視点を過去のある時点に移し、そこから「かなた」(過去における未来) に向く流れを表わしている。心理的には「逆行」も許されるが、視点を直線上のどこかに置いた場合、すなわち視点を時間の流れと結びつけた場合、時間と同一の、ただ一つの方法しか許されない。このようにみてくると、(30 b) および (31) がなぜ非文法的であるかがわかってくる。(30) では、「こなた」としての発話時点にとって、{明日} は「かなた」であり、動詞の示す行為が、その「かなた」から更に「かなた」へ志向しているために、{～てきます} は許されないわけである。(31) においても同様である。

2. 3. 2. 2. でみた時間的方向のほか、「感覚的方向」とでも名づけられるものがある。次は、その一例である。

(35) 春の日ざしに雪が消え, 黒い土が見え

$$\left. \begin{array}{l} \text{a) きた (てくる)} \\ \text{b) *ていった (*ていく)} \end{array} \right\} \text{ ときの喜びは, かくべつである。}^3)$$

(35) では, 視点の話者に対して, {黒い土} が, 視界の「かなた」から「こなた」へ, その姿を雪どけとともに, 徐々に現わしてくる (*ていく!) 光景を表現しているため, a) の方は適切であるが, b) は非文法的である。時間の経過にともなう物理的な変化が, 視点に対してどのような「方向」をもつかを叙述している。視点の視覚に訴えるものと同様に, 「聴覚・味覚・嗅覚・触覚」など, 視点の五感に訴えるものや, 「予感・実感」など心理的内容を示すものも, すべて「かなた」から「こなた」への作用としてとらえられるのが特徴的である。その若干例を以下に示そう。

(36) 鎮守の森から, 笛や太鼓の音が聞こえ $\left\{ \begin{array}{l} \text{てくる (てきた)。} \\ \text{*ていく (*ていった)。} \end{array} \right.$

(37) わたしには, 彼がいつか自殺するのではないかという予感がし

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{てきた (てくる)。} \\ \text{*ていった (*ていく)。} \end{array} \right.$$

(38) ちょうどその場にいるかのような**実感**さえ湧い

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{てくる (てきた)。} \\ \text{*ていく (*ていった)。} \end{array} \right.$$

以上と逆の方向をもつものの例として, 次の二文を考えてみよう。

(39) 彼は、子供や孫達にも会えずに死ん { ていった。
* できた。

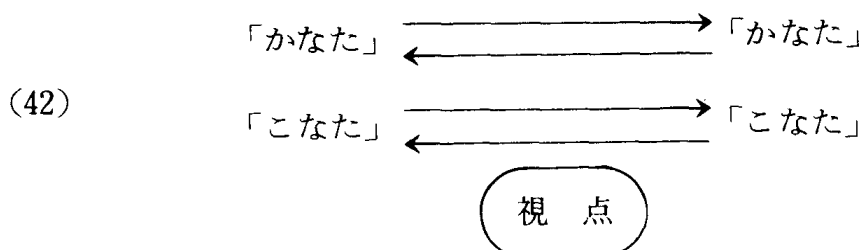
(40) 街頭にともっていた最後の灯も、鐘の音とともに消え { ていった。
* できた。

{死ぬ} , {消える} などの瞬間動詞は、それ自体が、「こなた」から「かなた」へ消滅する動作を表わすが、{~ていった} をともなうことにより、多少とも「経過」の色づけをされ、名残り惜しさの余韻をのこしている。

2. 4. 視点による方向に関連する例文として、最後に次の文を考察してみよう。

(41) これは、組ごとに一列に並んで、前の人から後ろの人へ、順々にボールを送っ { a) ていく } ゲームです。
b) * てくる }

(41) は、ボール送りのゲームを、一般的なルールとして陳述しているのであって、特に視点に関係づけて説明される必要のない例である。これを図式化してみると、次のようになろう。



この視点のもとでは、常に「かなた」から「かなた」へ、または「こなた」から「こなた」へ、という方向性を持ち、一般に {~ていく} の形式の方が好んで用いられる。法則、諺、格言、風俗、慣習など、一般的、客観的な事実を述べる場合の視点として

適切である。

(43) 金持ちになっていくと, 鼻が高くなっていくものだ。

(44) 魚も, ほかの生物と同じように, 自分の子孫をふやしていく。

2. 5. 2. 0. から 2. 4. までにわたって, 四形式には, いずれも「経過」および「方向」という二つの意味素が含まれていることをみてきた。これらの意味素は, 1. 1. ~1. 5. で述べたテンスにかかわる制約とは別個の, 独立した制約を, この四形式に与えている。したがって, この両要素を「アスペクト素」と呼び, テンスとは異なる文法範ちゅうとみなすべきであろう。

3. 0. 最後に, 次のような文を考察してみよう。

(45) これからは, 暖かくなっ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a) ていく} \\ \text{b) てくる} \end{array} \right\}$ でしょう。

(46) 今日から日一日と夜が長くなっ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a) ていきます。} \\ \text{b) てきます。 (= (7 a))} \end{array} \right\}$

(47) 彼の態度が今後どう変っ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a) ていく} \\ \text{b) てくる} \end{array} \right\}$ か, しばらく様子を見ていよう。

(48) 年をとって目がかすん $\left\{ \begin{array}{l} \text{a) でいく} \\ \text{b) でくる} \end{array} \right\}$ と, なんとも情けなくなるよ。

以上は, すべて {~ていく} と {~てくる} とが交換可能な例文である。2.

0. ~2. 5 で述べた時間的, 空間的, ないし心理的「方向」による制約をとくに受けなため, 両形式とも現われることのできるコンテキストをもっている。

それでは, 各文において, {~ていく} を選択した場合と, {~てくる} を選択した場合とでは, 意味に変化はないだろうか。何か微妙な差異が認められるだろうか。この点を検討してみよう。

まず (45) をみよう。これは, 現在から未来に向けて気候が徐々に暖かくなる経過を推量して述べているものであるが, アルフォンソ (Alfonso, 1966) は, 両形式の間に次のような差異を認めている。すなわち, {~てくる} の方は, 暖かい気候がこれから「到来する」(arriving) のであって, まだ現存してはいないことが含まれており, 他方 {~ていく} の場合には, 暖かい気候はすでに現存しており, その暖かさが次第に変化して (=より暖かくなって) いくことを表わしている, とみる。⁴⁾しかし, 次の二つの文から明らかのように, 両文の差異は, 暖かい気候が到来しているか否かにあるのではない。両文とも, 暖かさはまだ到来しておらず, これから徐々に到来することを推量しているのである。

(49) まだ寒いけれど, これからは暖かくなっ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ていく} \\ \text{てくる} \end{array} \right\}$ でしょう。

(50) * もう (少しばかり) 暖かいけれど, これからは暖かくなっ

$\left\{ \begin{array}{l} \text{ていく} \\ \text{てくる} \end{array} \right\}$ でしょう。

それでは, 2. で論じた「方向」の概念を適用して, この両形式をもつ文を比較検討してみよう。2. でみた通り, 話者を視点として二つの方向が考えられた。一つは, 「こなた」より「かなた」へ, もう一つは, 「かなた」より「こなた」へという方向で, それぞれ {~ていく}, {~てくる} と対応する。更に, 主語が問題とされたが, (45) では, {気温} が主語として潜在していることは明

らかである。ここで、{気温}は、(35)(36)における主語の{土}{音}などとは異なり、視点である話者を、外側から全体的に包み込んでいるもので、しかも直接に感じるができるのは触覚だけである点を、確認しておく必要がある。そこでまず、{~てくる}の方向を考えてみると、視点(「こなた」)に向って、「かなた」から、だんだんと暖かい気温が近づいてくることを示しているといえる。一方、{~ていく}の場合、「こなた」から「かなた」へ向って離れていくものはなんだろうか。勿論、暖かい気温でもないし、寒い気温でもない。視点そのものは移動しないものとみる限り、このような遠心的方向によっては説明できない。そこで、私は、これを説明するために、(42)で述べた、視点にとくに関係づけない「中立的方向」を適用する。すなわち、単に気象現象を客観的に、あるいは傍観的に報告したり、推測したりしているものであって、視点である自分(話者)にとくに関係づけない態度の現われとみるのである。その根拠は、次のような「状況」を想定してみれば理解できよう。

(51) $\left\{ \begin{array}{l} \text{関東地方} \\ \text{韓国南部} \end{array} \right\}$ は、今後日増しに暖かくなっ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ていく} \\ \text{てくる} \end{array} \right\}$ でしょう。

いま(51)の文を、関東地域にある放送局のアナウンサーが、天気予報として用いたとしよう。気象現象をただ報告として(それで十分なのだが)伝える場合は、{~ていく}の方が好んで用いられるだろう。また、もし関東地域の視聴者の「身になって」(=「視点に立って」)語る場合は、むしろ{~てくる}の方が用いられるだろう。このような使い分けの適切性を裏書きするものとして、次のような状況を想定してみたらよい。すなわち、さきのアナウンサーが、お隣の韓国南部、または、もっと遠方の国の気象を、日本の放送局から国内に向けて報告するとしよう(めったにないことだが)。この場合、視聴者である日本人の大多数には関係のないことであるから、アナウンサーは、彼等(日本人)の立場(視点)にたつ必要はないので、おのずと{~ていく}を用いるだろう。

そして、その方がこの状況では適切なのである。

(45)に戻って考えると、(b)の場合は、気象現象を、話者が聴者と同じ視点に立って、いわば自分たちに引きつけて言い表わしているのに対し、(a)の方は、とくに自分たちに引きつけることもなく、ただ外界の事象を事象として述べているのである。前者には、話者と聴者との「共感」または「親近感」がみられるのに対し、後者には、出来事に対する話者の単なる「描写」がみられる、と言えよう。⁵⁾

(46)においては、主語が{夜}となっただけで、(45)と全く同じ根拠で両形式文の意味のニュアンスを説明できる。次に、上にみた「共感」と「描写」という意味の要素に関し、天候から人間を主題とした用例に移して考察してみよう。

(47)においても、両形式は交換可能である。しかし、話者が{彼の態度}を問題とするとき、「誰に対する」彼の態度かによって、一方の形式は適切だが、他方は不適切であることがわかってくる。まず、話者である{私}に対する彼の態度が問題のときは、{~てくる}の方が適切であり、{私}以外の二人称、三人称に対する態度の場合には、{~ていく}の方が自然である。その理由は、{私}以外の場合、話者の視点とは特別に関係のない「中立的方向」で語られるのが普通だからである。

(52) a) 彼の態度が、私に対して、今後どう変っ $\left\{ \begin{array}{l} ?ていく \\ てくる \end{array} \right\}$ か、しばらく

様子を見ていよう。

b) 彼の態度が、{君、彼、末知の人}に対して、今後どう変っ

$\left\{ \begin{array}{l} ていく \\ ?てくる \end{array} \right\}$ か、しばらく様子を見ていよう。

しかし、話者が視点の中に、{君}や{彼}を入れた場合、別言すれば、「共感」

の対象とした場合には、むしろ {～てくる} の方が適切である。ただし、話者にとって {未知なる人} は、共感の対象とはなり得ないから、常に {～ていく} が適切である。{～ていく} が用いられる場合は、話者が出来事に対して、一定の距離を置いて眺めているのであり、{～てくる} の場合は、それとは反対に、自分のこととして共感しているのである。

母親が、病床にある子供を励ますときも、母親は子供と共感しているので、{～てくる} の方が適切である。

(53) 春になり暖かくなればきっとお前の病気もよくなっ $\left\{ \begin{array}{l} ?\text{ていく} \\ \text{てくる} \end{array} \right\}$
 から、がんばりなよ。

最後に、(48) の文を考えよう。これは、後半の部分から、老人自身の発話だろうということがすぐ理解できる。この場合も、話者が視点をどこに（誰に）置くかによって、問題としている両形式の間に差が現われてくる。たとえば、まず話者である老人が、目がかすむ事実を自分の実感として述べる場合には、{～てくる} は用いられるが、{～ていく} は不適切である。

(54) 年をとって目がかすん $\left\{ \begin{array}{l} *でいく \\ \text{でくる} \end{array} \right\}$ と、なんとも情けなくなるよ。

次に、話者（老人）が、老人になると目がかすむという事実を一般論として述べる場合には、{～ていく} の方が適切である。特に、話者が老人であっても、目がかすんでいない場合には、そうである。

(55) 年をとって目がかすん $\left\{ \begin{array}{l} \text{ていく} \\ ?\text{でくる} \end{array} \right\}$ と、情けなくなるもんだって。

また、老人一般に関する若者の、次のような独白の場合も、{～ていく}の方が適切である。

(56) 老人は、日ごとに目がかすん $\left\{ \begin{array}{l} \text{でいく} \\ \text{?でくる} \end{array} \right\}$ のかなあ。

3. 1. 3. 0. における考察が正しいとすれば、次のことが言える。

まず、2. で問題とした「経過」および「方向」というアスペクト素だけでは、十分に説明し切れない用例があること。それは、問題としている形式が交換可能な場合であること。しかし、用いられるコンテキストを詳しく検討していくと、交換可能であったはずのものが、適切性の問題で、必ずしも交換できないことがわかった。その際用いられた説明概念は、「共感」と「描写」であった。これらは、その基礎に、アスペクト素の「方向」という概念があり、そこから「派生」してきたものとみることもできる。しかしこれは、話者が文の「命題」に対して示す態度の表われであって、アスペクトとしての「方向」とは異なり、視点を変えることによってどちらの態度をも取りうる自由さがある。「方向」が物理的諸関係の中で固定されてしまうのと対立的である。もし命題に対する話者の態度を「ムード」と呼ぶことができるならば、「共感」と「描写」という要素も、ムードの一種とみなすことができよう。⁶⁾この種のムードは、他のすべての「『て』付助動詞」にも等しく見い出される、というのが私の見解である。

次に、話者の視点、話者の年齢・職業、発話に登場する人物に関する話者の知識や態度、といった、発話に関するいわば心理的・社会的コンテキストの要素が、文の適切性を大いに左右するものであることが理解できる。文の「構造」を云々する際、限定された表面の構造のみに注意を払って、潜在する心理的・社会的コンテキストを無視するならば、文を「生成する」ために必要にしてかつ十分なルールを発見することもできないことがわかる。⁷⁾

注

- 1) 本稿では, {犬が走って行く} {早く行って来い} などにみられる {～て行く}, {～て来る} は, 考察の対象外とする。この {行く}, {来る} は, 本動詞性を十分荷っており, その前に現われる {て} は, むしろその前の動詞と結合して, {行く}, {来る} の「方法」「仕方」などを示している。
- 2) 誰しも, 厳密な意味では, 雨の「降り始め」に気づくことはできない。なぜならば, 天からの降雨の「最初」は不明だからである。したがって, 降り始めの時間は, 気づく時間より常に過去である。
- 3) この用例と, 他の二, 三の文例は, 吉川 (1976) の詳しい資料 (小・中学校の国語テキストその他現代小説からのもの) に負う。ただし, 吉川とは, 理論上の問題で見解を異にする点が少なくない。
- 4) *Alfonso* (1966), Vol. I, pp. 458-9.
- 5) 「共感」という概念は, *Kuno, S. and E. Kaburaki* (1977) が問題としている “empathy” に近い。*Makiuchi* (1972) は, この “empathy” を受身表現に適用している。
- 6) たとえば, *Jespersen* (1924), p. 313 では, “mood” は次のように定義されている。「ムードは, 文の内容に対する話者の心の態度を表わす…」
- 7) この「心理的・社会的コンテクスト」については, *Lakoff* (1972 a) および *Lakoff* (1972 b), *Lakoff* (1973) などを参照。

参考文献

- Alfonso, Anthony* (1966) : *Japanese Language Patterns, Vols. I & II*, Sophia Univ., L. L. Center of Applied Linguistics.
- Jespersen, Otto* (1924) : *The Philosophy of Grammar*, London.
- Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki* (1977) : “Empathy and Syntax”, *Linguistic Inquiry*, Vol. 8, No. 4, Fall, 1977, MIT Press.
- Lakoff, Robin* (1972 a) : “Language in Context”, *Language*, Vol. 48, No. 4., pp. 907-927.
- (1972 b) : “The Pragmatics of Modality”, *Papers From the Eighth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, pp. 229-246.
- (1973) : “The Logic of Politeness; or, Minding your P’s and Q’s”, *Papers from the Ninth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, pp. 292-305.
- Makiuchi, Masaru* (1972) : “A Study of Some Auxiliary Verbs in Japanese”, Unpubli-

shed Ph. D. Dissertation, University of Illinois.

吉川武時（1976）：「現代日本語の aspekto の研究」，金田一春彦編『日本語動詞の aspekto 』155～327 頁，むぎ書房。